OUHS

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

ジャーナル

大体大

Contents　Vol.215

2018.4.2

02 ごあいさつ

03 NEWS
- 1 公務員試験
- 2 教員採用試験
- 3 ハンド女子、V5偉業達成
- 4 平成30年度入学試験志願者数確定
- 5 2教員に大島鎌吉賞
- 6 4団体2個人に学長賞
- 7 院開設25周年、博士後期課程開設15周年
- 8 大学院入試
- 9 5博士誕生　博士論文発表会
- 10 修士論文発表会

10 特集
- 1 モーグルにメダル17個をもたらせた男
- 2 レジェンド山本 “二刀流” 挑戦
- 3 スポーツの力、五輪の精神
- 4 宇野昌磨を追って

13 トピックス
- 1 熊取町と協働協定
- 2 ダンス国際交流
- 3 ウェスタン大と学術・文化交流
- 4 西安体育学院と交流
- 5 スポーツフォーラム
- 6 大阪タカシマヤが初コラボ
- 7 地域公開講座、教育講演会開く
- 8 健康福祉学部、地域公開講座最終回
- 9 退官教授最終講義
- 10 ケルン体育大で在外研修
- 11 スキー実習
- 12 スポーツキャンプおお賑わい
- 13 くまとりロードレースに1100人
- 14 キャンプ実習
- 15 女子バスケASEに挑戦!
- 16 1、2年生、キャリアフェスタに真剣
- 17 競技エアロビック日本一
- 18 第50回雨山祭
- 19 院修了式、学部卒業式

22 コラム　窓

23 我が青春の記　尾関一将　髙宮正貴

記事内職階、学年等は平成30年3月末日による

大阪体育大学

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

自らの可能性を信じて

大阪体育大学学長
岩上安孝

新入生の皆さん、大阪体育大学ご入学おめでとうございます。

日本選手の活躍に一喜一憂の日々を過ごしたピョンチャン（平昌）冬季オリンピック・パラリンピック。今大会は、ジャンプの葛西選手のようにオリンピック8度目となるベテランから、前回（ソチ）、前々回（バンクーバー）の悔しさを胸にリベンジする選手、10代の若手選手による女子フィギュアやスノーボードなど競技特性も反映されたチーム編成がなされました。

本学からは、2016年リオ・パラリンピック走り幅跳び銀メダリストの山本篤さん（大体大DASH認定アスリート・客員准教授）がスノーボード日本代表として大きな話題を呼びました。

代表選手達は、戦いの場に臨み生じ得るであろう様々な状況を想定し、日々「心・技・体」の向上に向け、努力・精進を積み重ねてきておりますが、オリンピックチケットをつかみながらも、結果を残せず明暗を分ける姿に、勝負の厳しさを改めて実感いたしました。

そうした中で、メダルの色合いは別として、練習に裏打ちされ実績を積み上げてきた選手達は、大舞台においても臆することなく持てる力を存分に発揮され、2020年東京に弾みをつける、たくさんのさわやかな感動を残してその幕を閉じました。

同年代の選手達が繰り広げた雪上、銀盤でのパフォーマンス、皆さんはどのような感想を抱いたでしょうか。

さて、皆さんは入学式、オリエンテーションを通じ、大学生としての自覚を新たにされていくことと思いますが、大学生活のスタートに際し、私自身の大学生活、半世紀が経過し記憶も薄れてはおりますが、その断片を紹介します。入学式は学生服で臨んだことしか思い浮かびませんし、オリエンテーションの記憶は皆無。一方で陸上競技部から連絡が入り、3月中下旬かと思いますが、大学の陸上部はどのような雰囲気なのか、寮生活になじめるかどうかなどの思いを巡らし、当座に必要な練習着とお米を抱え、各駅停車に身を委ねながら上京しました。風通しの良い、今にも朽ち落ちそうな古びた木造の寮、上級生2人、同窓生3人の5人部屋は、豆電球に先輩達の汗のしみ込んだ畳の一角に勉強机が置かれ、机の下に足を潜らせながらの雑魚寝でした。食費を集める役割でしたが、誰もが懐具合は窮しており、苦労したことは鮮明に思い出すことが出来ます。

寮の目の前は400㍍の弾力ある黒土のグラウンド、早朝練習はフリー、練習前後は、全員でグラウンド整備、特に冬場は、トラックの蓆引きが年中行事、練習後は近くの銭湯に浸かり、先輩の背中を流したり、マッサージ、競技ごとのミーティングも定期的に行われ、技術面やメンタル面を含めてフリーな意見を交わしておりました。

現在とは様々な面で環境も異なりますが、私にとりましては懐かしい青春の1ページであり、自らの成長に繋がるたくさんの刺激をいただきました。

新入生の皆さん、4年後の自分の姿を描いてみてください。これからの大学生活、様々な葛藤が始まるかと思いますが、志を高く常に半歩前を見据え、自らの可能性を信じて進み続けてください。

悔いのない日々を

浪商学園理事長
野田賢治

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。学園を代表して心からお祝い申し上げます。

大阪体育大学は、前回の東京オリンピック開催の余韻が残る1965（昭和40）年、スポーツのフロンティアを目指して創立されました。開学にあたり、東京オリンピックの強化本部長を務められ、後に日本人初のオリンピック平和賞を受賞された大島鎌吉先生を副学長として、また東京オリンピックスポーツ科学委員で、後に日本体育学会会長に就任された加藤橘夫先生を学部長としてお迎えしました。

体育・スポーツの最先端におられたお二人の思いが、大阪体育大学の教育の源です。50年以上のときを経た今も色あせることなく、脈々と受け継がれています。

今の社会では、心身ともに健康で、チャレンジ精神にあふれた人材が求められています。皆さんは、スポーツ、健康、教育等の高度な専門的な教育を受け、それをより深く研究し、自らのものとされるでしょう。皆さんが本学で得た知識や経験は、現代社会が求めているものと一致していると思います。

何よりも卒業生の活躍ぶりが、雄弁に物語っています。皆さんも大体大生となったからには、そういう自覚を持って、日々研さんを積んでいただきたいと思います。

4年間というのは長いようですが、終わってみれば「あっ」という間の出来事になってしまうに違いありません。悔いのない一日一日を送っていただき、先輩たちを超える立派な社会人に成長されることを、心から願ってあいさつとします。

企業は活況、公務員は安定した合格者を輩出！

公務員現役合格者延べ91人

平成29年度の公務員現役合格者が3月1日現在、延べ91人となった。内訳は国家公務員（刑務官、自衛官）10人、地方公務員（警察官、消防官、行政職）81人。昨年度の94人から微減となった。消防官は昨年より減少したが、22人の合格者となり、行政職は例年を上回る5人の合格者を輩出した。大阪府警をはじめとした警察官も昨年を上回る54人の合格者となり、公務員合格者は、昨年の過去最高に次ぐ合格者数となった。

大体大生のウィークポイントでもある筆記試験の学力向上、突破を目標に、平成29年度卒の4年生は、これまでの公務員対策講座（2／週）、学習支援室との連携、フォローアップ面談に加え、論文対策講座（1／週）を増やして、学力向上につなげた。就職本番を迎え、今年も大体大生の力が発揮できるよう期待している。

恒例の全学あげてのビックイベントとなったキャリアフェスタ。3年生対象は9月に開催し、大手業界の人事担当者を招き、2日間で26の企業、団体、進学等のブースを設け、学生は1日4ブース各業界の話を聞いて業界を研究していく。1、2年生は2月に開催し、2年生対象は、今年は各業界から内定、合格が決まった4年生を招いての新たな企画を実施。14のブースから4つを選択し、身近な先輩の話を聞いて自身の将来について考えるきっかけを目指している。1年生対象のフェスタでは、「将来について考えよう」のテーマで卒業生による2組の特別講演を行った。

キャリア支援の特徴のひとつである学内セミナーは、企業等の人事担当者から昼休みを利用して説明会を開催。例年採用していただいている企業をはじめ、新規に開拓した上場企業、福祉、医療、生涯スポーツなど、昨年度を上回る110回を超える説明会を開いた。近年は世間の体育会系の評価が高く、本学の学生への各業界からの期待や採用ニーズは、一層高まっていると感じている。現段階では企業等に就職する者は254人（企業、スポーツ関連、医療・福祉、自営業）。これらキャリアフェスタや、学内セミナーをきっかけに、進路を幅広く考え、決定する者も多い。

キャリア支援センターでは「学生自らがキャリアデザインを考え、自分の将来ビジョンを設計できるよう支援する」をミッションに掲げている。あいさつや人の話を聞くこと、社会のルールを遵守するなど、生活習慣の重要性（1年生オリエンテーション）から、社会の仕組みや業種、職種研究、社会人としての心構えや常識（キャリアデザイン・キャリアフェスタ）などを通して、より積極的に支援を進め、社会で活躍する学生の育成を目指している。

【キャリア支援センター】

教員採用試験

現役合格27人に回復

平成29年度（平成30年度採用）の公立学校教員採用試験が終了した。35の自治体を述べ294人が受験し、現役合格者は27人である。

内訳は、大阪府で14人（高校：3人、中学校：1人、小学校：3人、特別支援：7人）、他自治体の合格者13人は、大阪市（小学校：1人）、愛知県（小学校：1人）、大分県（特別支援：1人）、岡山県（中学校：1人）、神奈川県（特別支援：1人）、京都市（小学校：1人）、岐阜県（特別支援：1人）、滋賀県（中学校：1人）、奈良県（特別支援：1人）、兵庫県（中学校：2人）、三重県（高校：1人）、和歌山県（特別支援：1人）となっている。

現在、私立学校関係の専任教員合格者は0人であるが、常勤講師の採用予定者は数人いる。

毎年、これまでの指導内容や、指導方法等のより一層の改善に取り組んできた。具体的には、教員採用受験対策講座や学内説明会の実施、模擬面接・模擬授業等の指導や全国公開模擬試験・解答説明会、そして体育大学の同窓会館（アネックス）を利用しての面接練習等も実施した。OB・OGの参加も年々増え、うれしいことに「合格」連絡も数多く入っている。

教員を目指す学生にとって、教員採用試験に合格することがゴールではなくスタートでしかない。現場に出れば、教員として「即戦力」が期待されることになる。そのためにも常に「学び続ける教員」でなければならないことを繰り返し指導している。

次年度は、教育学部の1期生が卒業する。進路・就職状況によっては、これからの大阪体育大学を左右することとなり、他大学関係者や受験生からは相当な注目をされているものと思う。

【教職支援センター長　北川憲一郎】

大阪体育大学　年度別教員採用試験（現役）合格者状況（H30年２月１日現在）

卒業年度	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21
一次合格者								47
二次合格者	1	4	7	2	8	7	10	23

H24～教職支援センターを立ち上げた

卒業年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29
一次合格者	34	30	56	69	63	70	51	56
二次合格者	9	20	30	30	30	27	22	27

V5に関西スポーツ賞、祝賀会盛大に

ハンド女子偉業達成

ハンドボール部女子と楠本監督記念撮影

V5おめでとう。17年11月3日から7日まで、いしかわ総合スポーツセンターで開かれた高松宮記念杯全日本学生ハンドボール選手権大会で史上3校目の5連覇を果たしたハンドボール部女子の関西スポーツ賞表彰式と、優勝祝賀会が新春の1月、相次いで行われた。改めて偉業達成を祝うとともに、楠本繁生監督（体育学部准教授）、選手たちが史上初の6連覇を誓った。（大会の詳報はOUHSスポーツ第29号に掲載）

関西運動記者クラブ（新聞通信、放送、175社、会員約700人）が選ぶ第61回関西スポーツ賞の表彰式は1月15日、大阪市のホテルモントレ大阪であった。選考委員会は12月に行われ、25人の幹事が、各分科会から推薦された関西地区を基盤に、五輪やインカレなどで活躍した団体、個人を選考対象に2団体、個人7選手を選んだ。本学ハンドボール部女子は、5連覇もさることながら、学生相手に130連勝という群を抜く強さが高く評価された。本学が団体表彰されるのは、硬式野球部男子が06年に第55回全日本大学野球選手権大会（明治神宮大会）で初優勝して以来のこと。

表彰式には楠本監督、選手を代表していずれも4年生の馬場敦子主将（北國銀行JHL）、佐原奈生子（同）、徳永千紘（HC名古屋mini miniエイジンシーJHL）、酒井優和子（本学大学院）、長谷川小夏（パシフィックサプライ）、神田菜実子（大阪トヨペット）の6選手が晴れの舞台に臨んだ。

受賞の挨拶をする馬場主将

選手たちはあらかじめ控室で各社の取材を受け、他の受賞者たちと壇上に。代表幹事から表彰状とクリスタルトロフィーを贈られ、司会のアナウンサーが代表インタビュー。楠本監督は「すべて選手たちのお陰。6連覇を意識することなく、新たにスタートを切るつもりで試合に臨みます」と、アスリートファーストを強調、馬場主将は「苦しい試合を戦い抜き、栄えある賞を受賞できたのも、支援いただいた多くの方々のお陰。6連覇はプレッシャーがかかると思うけど、後輩たちに託します」と後輩にエールを送った。

懇親会では各社の記者から賛辞を浴び、他の受賞者たちと記念写真を撮ったり、健闘をたたえあうなど交流を深めた。鏡割りには馬場主将が指名され、ビンゴゲームでは3選手が商品をゲットするなど、満喫していた。

他の受賞者は次の通り。

【団体】セレッソ大阪　ルヴァン杯、天皇杯の2冠【個人】阿部詩（夙川学院高）講道館杯全日本柔道体重別柔道選手権女子52キロ級優勝▽今永虎雅（王子工高）愛媛国体

記念品の盾を受け取る楠本繁生監督

ボクシング少年男子ライト級優勝。高校3年間で全国総体3回、国体3回、全国選抜2回を制し、史上初の高校8冠▽荒木一成（同）同国体ボクシング少年男子ウエルター級優勝。今永と同じ史上初の高校8冠▽多田修平（関学大）ロンドン世界陸上選手権男子四百メートルリレー銅メダル▽安田祐香（滝川第二高）日本女子アマチュアゴルフ選手権初優勝▽清水悠太（西宮甲英高等学院）全日本ジュニアテニス選手権シングルス、ダブルス優勝▽東晟良（和歌山北高）全日本フェンシング選手権個人女子フルーレで史上最年少優勝【特別】鳥谷敬（阪神タイガース）プロ野球史上50人目の通算2000安打▽桑原謙太郎（同）自身初のリーグ最優秀中継ぎ投手

受賞者を代表して豪華メンバーと鏡割りをする馬場主将（右から2人目）

次は史上初のV6!!

女子ハンド祝賀会盛大に

ハンドボール部女子のインカレ5連覇を祝う祝賀会は1月13日、大阪ウェスティンホテルで盛大に開かれた。部員の家族、OG、高校時代の恩師や関係者約200人が参加、偉業を祝った。オープニングでは特別映像が流れ、早くもボルテージは上がった。

岩上安孝学長が「選手たちは4年の経験をつなげることでしょう。学生の可能性をここまで引き出し、鍛え上げた楠本監督、それを支えた宍倉総監督、さらにご支援いただいた大勢の皆様に御礼申し上げます。新春を飾るのにふさわしい会になり、本学の今年1年間の運勢を占う良い機会に恵まれた」とあいさつ、野田賢治理事長は「先輩たちが築いた4連覇を上回った。支えていただいている多くの方にありがとうと言いたい。6連覇を目指し、新記録に挑戦してほしい」と激励、日本ハンドボールリーグ、家永昌樹GMの乾杯の発声で、祝賀会は始まった。

展示された優勝杯、トロフィーなど

目録を手にする楠本監督（左）と野田理事長

宴の中、決勝のVTRが流されると、参加者はまるで会場で応援しているかのように、大きな拍手を送ったり、声援で後押ししていた。司会者に一人ひとり名前を読み上げられて、選手40人が壇上に。その度に歓声や拍手の渦が巻き起こった。

学生リーダーが学年ごとに質問、ウイットに富んだ返事もあり、笑いを誘った。壇上でダンスのパフーマンスを披露する学生もいて、さらにヒートアップした。

選手を代表して馬場敦子主将が「5連覇への道のりは決して楽なものではなかった。リーグ戦中に海外遠征する主力選手がいたり、厳しい状況だった。インカレ優勝は達成できるのかと思ったりした。このチームで5連覇できて本当にうれしかった。多くの支えになっていただいた方々には感謝の気持ちで一杯。次はかなりのプレッシャーがかかるだろうけど、後輩たちは必ずやってくれるだろうと信じています」とV6を託した。

楠本繁生監督（体育学部准教授）は「素晴らしい会をありがとうございます。選手たちの頑張りでこういう結果を出せた。そういう子たちに出会えることはすごいことで、体大力が選手たちを支えてくれている。多くのスタッフに出会えたことにも感謝している。これからも選手と一緒にこつこつとやっていき、またこういう場を設けてもらえるように頑張ります」と、V6宣言をした。

これだけの人が支えてくれた

総志願者数2695人

平成30年度入試

平成30年度入試は、3月8日の教育学部後期入試をもって全日程を終了した。志願者総数は2695人で、前年比96・4％となり、若干の減少となった。

体育学部は1904人で、ほぼ前年並みだった。スポーツ教育学科は1313人で前年を12％上回った。AO入試の自己推薦型で、当学科の募集を始めたことが志願者増につながった。一方、健康・スポーツマネジメント学科は591人と前年比81％の志願者となり、減少が続いている。

教育学部では小学校教育コースは、175人で対前年比80％となり、減少は今年度も続いている。保健体育教育コースは616人で、対前年比91％と昨年志願者が増えた揺り戻しの減少となった。

旺文社の教育情報センターによれば、私立大学AO入試全体の志願状況は、前年比7％増、合格者は1％減で、倍率2・1倍とアップした（前年1・9倍）。また、私立大学の公募制推薦入試全体でも、志願者は前年比6％増（指定校推薦も6％増）だった。京阪神地区の倍率を見ると、前年の3・6倍から4・0倍にアップしている。背景には一般入試での合格者絞り込みへの警戒や、国公立大学の文系・教員養成系学部の縮小があると指摘される。

総じてAO入試、推薦入試の志願者のパイは昨年度より大きく、合格者の絞り込みも進んでいた。そのすべてが体育・スポーツ、あるいは教育系志望ではないものの、本学が年内入試で志願者増を実現できなかった。

河合塾の私大志願状況集計から学部系統別志願を見ると、今年度も「文高理低」傾向が続いていた。私立大学全体の志願者が、前年比107％と増加しているだけでなく、「経済・経営・商」で前年比111％、「社会・国際」111％、「文・人文」110％、「法・政治」106％などの諸系統で、志願者増が確認できる。

一方、理系では「看護」113％と「医療技術」105％は増えているが、「医」99％、「薬」92％、「農」96％と減少傾向にある。「芸術・スポーツ科学」の志願者は102％と増加しており、本学が対前年比減だったことを思うと、志願者掘り起こしの策を練らなければならない。現に、大阪教育大学（前期）は小学校1・7倍、特別支援2・7倍、小中保体2・9倍、中等保体4・2倍、スポーツ科学6・6倍、奈良教育大学は特別支援2・6倍、保体（初）3・5倍、保体（中）6・3倍、京都教育大学は発達障害2・1倍、滋賀大学教育学部は実技（体育）7・7倍といった倍率から、学校教育ならびに体育・スポーツ科学分野はまだまだ志望者があり、合格を競い合う状況である領域だとわかる。

最後に私立大学の地区別志願状況を確認しておくと、全体では前年比107％だったが、地域によって差がある。本学学生募集にかかわりが深いエリアを主にみると、近畿9％増、北陸5％増、東海4％増、九州3％増で、いずれも志願者数が前年を上回っていたが、中国と四国がそれぞれ5％減、2％減だった。近畿地区で私大志願者が全体として増えていたにもかかわらず、本学が今年度大阪、京都、奈良、滋賀で志願者減少を起こしたことは、大きな反省点である。

もとより、こうした全体的動向のみだけでは、本学の学生募集の次の一手は見えてこない。2018年度入試が終了した今、来年度入試での志願者増に向けて巻き返し策に取り組んでいる。高校生へのPR活動として、入試情報サイトでの動画配信や、接触者への継続的情報提供、進学相談会やガイダンス、高校訪問などの対面型広報の展開、オープンキャンパスや、入試対策講座の開催など、考えうる機会をとらえて本学の魅力を発信していきたい。教職員の皆さまには、各コンテンツの充実のために情報、データの提供をこの場をお借りしてお願いしたい。【入試部】

〈教育学部 教育学科〉

入試制度	学　科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
AO入試	小学校教育	7	22	22	8
	保健体育教育	7	33	33	7
	計	14	55	55	15
推薦入試前期E※	小学校教育	7	16	16	9
	保健体育教育	17	51	51	22
	計	24	67	67	31
推薦入試前期F※	小学校教育	26	26	26	26
	保健体育教育	6	41	41	10
	計	32	67	67	36
一般入試前期E	小学校教育	−	−	−	−
	保健体育教育	15	209	208	71
	計	15	209	208	71
一般入試前期F	小学校教育	25	89	88	−
	保健体育教育	5	224	224	−
	計	30	313	312	132
一般入試後期	小学校教育	5	22	22	−
	保健体育教育	5	58	54	−
	計	10	80	76	37
合　計	小学校教育	70	175	174	−
	保健体育教育	55	616	611	−
	計	125	791	785	322

※内部、指定校推薦入試含む
※一般入試前期F、後期の合格者数は第2志望制度を実施していますのでコース別では記載していません

〈体育学部〉

入試制度	学　科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
AO入試	スポーツ教育	35	228	228	39
	健康・スポーツマネジメント	20	94	94	29
	計	55	322	322	68
スポーツ特別AO入試	スポーツ教育	75	123	123	122
	健康・スポーツマネジメント	25	19	19	19
	計	100	142	142	141
推薦入試A※	スポーツ教育	70	250	249	81
	健康・スポーツマネジメント	35	101	99	48
	計	105	351	348	129
推薦入試B※	スポーツ教育	35	183	183	37
	健康・スポーツマネジメント	45	105	103	59
	計	80	288	286	96
一般入試A	スポーツ教育	60	252	251	59
	健康・スポーツマネジメント	40	120	117	47
	計	100	372	368	106
一般入試B	スポーツ教育	45	274	273	101
	健康・スポーツマネジメント	35	152	152	83
	計	80	426	425	184
外国人入試	スポーツ教育	若干名	3	2	1
	健康・スポーツマネジメント	若干名	0	0	0
	計	若干名	3	2	1
合　計	スポーツ教育	320	1313	1309	440
	健康・スポーツマネジメント	200	591	584	285
	計	520	1904	1893	725

※内部、指定校推薦入試含む

常勝軍団の指導者と若き指導者が受賞

大島鎌吉スポーツ賞

平成29年度大島鎌吉スポーツ賞授賞式が1月11日、L号館（開学50周年記念館）201教室で行われ、ハンドボール部女子監督の楠本繁生准教授と、サッカー部男子監督の松尾元太助教の2人の指導者が表彰された。野田賢治理事長から2人に賞状が贈られ、2人の指導者からは感謝の言葉と来季への意気込みが述べられた。

受賞者、受賞理由、コメントは次の通り。

ハンドボール部女子監督　楠本繁生准教授

楠本准教授、野田理事長（左から）

〈高松宮杯第53回全日本女子学生ハンドボール選手権優勝（5連覇）〉

昨年に引き続き、このような素晴らしい賞をいただき、うれしさと感謝の気持ちでいっぱいです。選手の日々の努力で、私も賞をいただけている状況です。学生の努力はもちろんですが、日々の活動や授業などで支えてくださっている教職員の皆様の後押しがあってのことだと思っています。ありがとうございます。

今年も既に新チームはスタートしており、目標は常に高いところにということで、変わらず高い山の頂点を目指して頑張っていきたいと思います。

サッカー部男子監督　松尾元太助教

松尾助教、野田理事長（左から）

〈第29回ユニバーシアード、男子サッカー優勝（菊池流帆・体育3年）〉

この度は素晴らしい賞をいただき、本当にありがとうございます。（大体大）サッカー部を代表して、ユニバーシアードで世界一に輝いたのは、選手が頑張ったことだと思います。菊池流帆選手だけではなく、周りのすべての学生との日々の切磋琢磨の中でなし得た事だと思います。私がこの場にいますが、サッカー部のいろんなスタッフがかかわり、選手の成長に繋がったと思っています。

それと、彼は非常に意欲が高く、2年生の冬にはジャンプ力アップのためにバレーボール部の練習に参加させていただき、ジャンプの方法を長江先生の元で教えていただきました。サッカーだけでなく、大阪体育大学すべての先生に支えられ、選手の実績が残ったと思います。今後ともサッカー部の活動だけでなく、学業面や多くの面でサポートしていただくことで、サッカー部が成長すると思っています。今後は、世界1位に負けない実績をチームとして残せるように頑張っていきたいと思います。

4団体2個人に学長賞！

平成29年度学長表彰式が1月26日に行われ、インカレ優勝や、世界を舞台に活躍した4団体、2個人が受賞した。

壇上では受賞するすべての団体、個人が岩上安孝学長から表彰状を授与された。岩上学長は、すべての受賞者にお祝いの言葉を述べた後、敗者に敬意を持つ、スポーツマンシップの大切さを投げ掛ける言葉を選手たちに送った。4年間、青春を捧げてきた部活動を引退し、卒業を迎える4年生。岩上学長は4年生の活躍をたたえ、「全員で4年生に拍手を送ろう」と会場に呼びかけると、集まった学生、教職員ら全員からねぎらいの拍手が送られた。最後に岩上学長は「次の大体大スポーツを担う下級生に先輩たちが残した物を引き継いでいって欲しい」と述べ、本学すべてのクラブが大きく羽ばたくことを願った。

受賞者個人を代表して、日本代表メンバーとして第29回ユニバーシアードで世界一になったサッカー部男子の菊池流帆さん（体育3年）は「このような賞をいただき、大変うれしく思います。大阪体育大学の誇りを持ってこれから世界で活躍できるような選手を目指していきたいと思います」と感謝の意を表し、世界で活躍することを誓った。

団体を代表して、高松宮杯第53回全日本女子学生ハンドボール選手権5連覇を成し遂げたハンドボール部女子の馬場敦子さん（同4年）は「このような賞をいただきうれしく思います。この賞をいただけたのも、大学にかかわるすべての方々の支えがあってのことだと思います。支えてくださったすべての人に感謝し、今後も頑張っていきたいです」と感謝の気持ちを述べた。

〈受賞団体、個人一覧〉

▽ハンドボール部女子　高松宮杯第53回全日本女子学生ハンドボール選手権優勝（5連覇）〉▽アルティメット部女子　第28回全日本大学アルティメット選手権大会▽なぎなた部　第56回全日本学生なぎなた選手権大会演技の部優勝▽ライフセービング部　第8回全日本学生ライフセービングプール選手権大会、男子4×50メートルメドレーリレー優勝▽サッカー部男子、菊池流帆　第29回ユニバーシアード優勝（世界一）▽水上競技部、金持義和（M2）第23回デフリンピック夏季大会、銀メダル4個、銅メダル3個獲得

院開設25周年、博士後期課程開設15周年

記念式典、祝賀会盛大に

大阪体育大学大学院25周年・博士後期課程開設15周年記念式典と祝賀会が、10月28日、本学L号館（開学50周年記念館）で開かれた。台風が近づき、雨が降る中、200人を超える卒業生、教職員、大学院生たちが参加した。

岩上安孝学長が「加藤橋夫学長が院設置を訴え、厳しい状況を乗り越えて、1992年に西日本体育系大学で初めて博士前期課程が誕生、2009年に組織を改変、国際的に活躍出来る人材の育成に当たった。1993年、一期生を送り出し、以降、多くの人材を輩出、発展し続けている。さらなる充実、発展を目指す」と式辞を述べ、前島悦子大学院研究科長が「大学院が設置されたことで、体育学がスポーツ科学に発展、研究領域が広がっていった。自然科学、人文科学分野で高度な研究者が活躍、人類の進歩に寄与している」とあいさつ。

初代研究科長の金子公宥名誉教授が「大学院開設創世記について」をテーマに基調講演、「西日本初のスポーツ系大学の大学院創設、2001年には博士後期課程を設置するなどのことで、東奔西走」と並ならぬ苦労があって今日に至っていることを、ユーモアを交えた〝金子節〟を披露した。

記念シンポジウムでは、前島、藤本淳也、浜田拓、石川昌紀教授が登壇、土屋裕睦教授の司会で「未来を託す照らす孝動―大阪体育大学の歩みと展望―」をテーマにそれぞれの研究についてパネルディスカッション、フロアも交えて活発な討議をした。

式典終了後、会場をホテル日航関西空港に移して祝賀会を開き、あちこちで思い出話しに花が咲き、「これからの大学院のあり方」などについても、時間が経つのも忘れるほど、話しが弾んでいた。

熱を帯びるパネルディスカッション

初代研究科長 金子公宥名誉教授

増原名誉教授のスピーチを聞く教職員

大学院入試

大学院の平成30年度入試の志願者総数は、博士前期課程の38人は前年度比237・5％と増加し、博士後期課程の1人は、前年度比9％と減少した。次年度入試に向け、博士前期課程は引き続き定員24人以上の志願者となるように、博士後期課程においても志願者増を目指し、本学大学院の魅力をより発信できるように広報活動を行っていきたい。

【大学院事務室】

〈大学院スポーツ科学研究科　博士後期課程〉

総計

	定員	志願者数	受験者数	合格者数
一般選抜	6	1	1	1
学内選抜	若干名	0	0	0
合計	6	1	1	1

学内選抜入学試験

	定員	志願者数	受験者数	合格者数
学内選抜	若干名	0	0	0
合計		0	0	0

A日程入学試験

	定員	志願者数	受験者数	合格者数
一般選抜	A日程・B日程併せて6名	0	0	0
合計		0	0	0

B日程入学試験

	定員	志願者数	受験者数	合格者数
一般選抜	A日程・B日程併せて6名	1	1	1
合計		1	1	1

〈大学院スポーツ科学研究科　博士前期課程〉

総計

	定員	志願者数	受験者数	合格者数
一般選抜	24	29	28	22
学内選抜	若干名	5	5	5
スポーツ選抜		2	2	2
社会人選抜		0	0	0
外国人選抜		2	1	1
合計	24	38	36	30

学内選抜入学試験

	定員	志願者数	受験者数	合格者数
学内選抜	若干名	5	5	5
合計		5	5	5

A日程入学試験

	定員	志願者数	受験者数	合格者数
一般選抜	A日程・B日程併せて24名	22	21	16
スポーツ選抜	若干名	0	0	0
社会人選抜		0	0	0
外国人選抜		1	1	1
合計		23	22	17

B日程入学試験

	定員	志願者数	受験者数	合格者数
一般選抜	A日程・B日程併せて24名	7	7	6
スポーツ選抜	若干名	2	2	2
社会人選抜		0	0	0
外国人選抜		1	0	0
合計		10	9	8

ぴりりとした緊張感

博士論文発表会

本年度も以下に示す5題の博士論文が提出され、1月16日、17日、24日の3日間に渡りL号館（開学50周年記念館）で発表会が開催された。内訳は、スポーツ心理分野3題、バイオメカニクス分野、スポーツマネジメント分野から各1題の合計5題。実際に競技で用いる投てき用の「やり」を手にプレゼンする姿もあり、いずれも体育・スポーツ科学の現場に根差した実証的かつ実践的な内容だった。

1 實宝希祥：評定系競技継続による認知機能の変化

2 杉山真人：不確実な環境におけるタイミングの学習及び制御

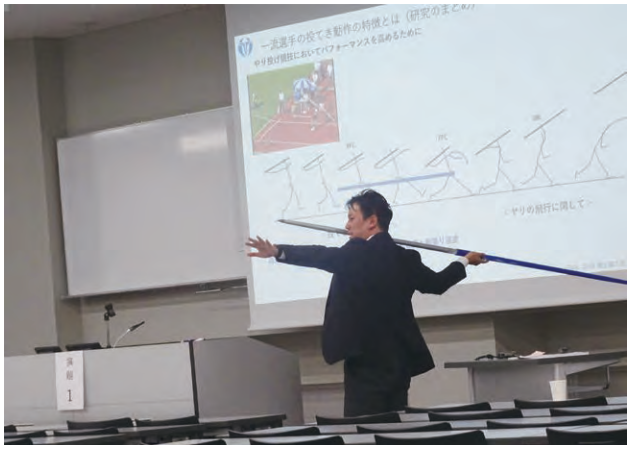
3 山越章平：大学生アスリートにおける反すう特性・省察特性がメンタルヘルスに与える影響とそのメカニズム―状態自尊感情に着目して―

4 村上雅俊：やり投げ競技におけるパフォーマンスと投てき動作の関係―コーチング現場に役立つ科学的根拠の提供を目指して―

5 冨山浩三：スポーツがもたらす社会的インパクトがスポーツチーム・クラブマネジメントに与える影響―地域愛着の視点から―

会場には教職員、大学院生・研究生はもとより、永吉宏英先生（元学長）、伊藤章先生（元研究科長）をはじめとする多数の名誉教授の先生方にもお越しいただき、それぞれ発表40分、質疑応答15分のアカデミックな時間を愉しんだ。とは言え、発表者から見ればこの時間はディフェンスの時間でもあり、さながら真剣勝負の場となる。特にスポーツ科学は分野横断的な学問であるため、異なる分野からの質問は自己盲点を突かれる場合も多い。博士論文の主張に1つでもかしが見つかれば、その後の合否審査に影響する。それぞれの分野にはそれぞれの視点がある。それらの複眼的な批判に耐えてこそ「PhD」、すなわち真理発見に資する学問の最高学位「博士号」が与えられるのである。和やかな雰囲気の中にも、ぴりりとした緊張感があるのはこのためである。

かつて、人文社会系を中心に博士の学位を「足の裏の米粒」に例える人がいた。「取らないと気になるが、取ったところで食えない」、つまり「博士になるのは大変なことだが、その割に就職には役立たない」のような揶揄であろうか。この揶揄はスポーツ科学、少なくとも本学の博士後期課程には当てはまらない。ちなみに今回の発表者全員が大学で教育・研究職に既に就いており、博士課程在学中あるいは学位取得前にその実力を見込まれてその任に当たっている。筆者の研究室でも博士取得を見込んで、在学中に大学や研究機関に就職の決まるケースが少なくない。社会から求められている体育・スポーツ科学の専門家育成のために、本学大学院の果たすべき役割はますます高まっている。【体育学部教授　土屋裕睦】



やりを手にプレゼンする村上さん

多岐にわたる学問分野から20演題

修士論文発表会

第28回修士論文発表会が、1月20日開催された。発表会は前島悦子研究科長の開会のあいさつからスタートし、その後、20演題の発表が次々と行われた。本学大学院には10の学問分野が設置されているが、今年度の修士論文発表会でも、スポーツマネジメント、スポーツ心理学、スポーツ医学、スポーツ栄養学、バイオメカニクス、スポーツ生理学など多岐に渡る学問分野からの演題から構成されていた。

各演題の発表時間は10分間だが、寝食を忘れるほど取り組んだ2年間の研究成果を10分間という限られた時間のなかで発表するということは、逆に大変な事ではなかったのではないかと思う。しかしながら、いずれの発表者も、専門分野以外の方も多く参加していることを踏まえ、大変分かりやすく、丁寧な発表を行っていた。各演題の発表後に設けられた5分間の質疑応答ではフロアから多数の質問があり、質疑応答の時間を超える場面も見られた。すべての発表が終了した後、今年度限りで退職される荒木雅信教授より講評をいただき、閉会となった。研究に関して、在学中に思い通りに進んだ者、逆に思い通りに研究が進まなかった者など様々な過程を経ていたと思うが、緊張のなかにも発表を終えたときの安堵（あんど）と誇らしげに見えた姿がとても印象に残った。

最後になりますが、大変忙しいなか、発表会の準備や、運営をサポートしていただいた教職員、助手、院生の皆様、当日の座長を引き受けていただいた先生方に、深謝申し上げます。【体育学部准教授　三島隆章】

プレゼンを真剣に聞く院生たち

特集

平昌オリンピック・パラリンピック特集

みせた極める力

多くの国民、復興遠い東日本大震災、熊本大地震の被災者たちに勇気と感動を与えた平昌五輪、パラリンピックは終わり、2020東京五輪・パラリンピックにバトンタッチした。。

「マスコミはメダル争いばかりを伝えている」との声も聞かれたが、選手たちは4年間、少しでも良い色のメダル獲得に照準を合わせて、苦しいトレーニングを積んできた。メダルという大きな目標があればこそだ。

平昌五輪はNHK、民間放送の地上波（一部を除く）と、ライブ配信を合わせて、放映は実に600時間に及んだ。ビデオリサーチ調べで、2月19日から25日までのスポーツ視聴率トップ10はすべて平昌五輪中継。NHKがランキング入りしたのは8回、ABCが2位、読売TVが3位に食い込んだ。

本学関係者で五輪にかかわったのが、マスコミ、フィギュアスケートのコーチ（トレーナー）、管理栄養士、メーカー、パラリンピックは〝夏冬二刀流〟のレジェンドと合わせて6人が、それぞれの立場で参加した。

五輪、パラリンピックにかかわった「大体人力」を特集した。

◇◇◇

平昌五輪には、大学院博士後期3年の近藤衣美（えみ）さんが、所属している国立スポーツ科学センター（JISS）スポーツ科学部の管理栄養士として、現地で「食」と「栄養管理」にあたり、フィギュアスケートコーチ登録で酒井翔平さん（2012年度体育学部卒）が帯同、大学で得たアスレティックトレーナーとしての知見を生かし、選手の体力をサポートした。

モーグルにメダル17個をもたらせた男

マテイリアルスポーツ藤本誠社長

モーグルのスキー板制作では「世界の顔」になった、マテリアルスポーツ社長、藤本誠さん（59）＝大阪府守口市＝は、本学の13期生。藤本さんの手によるスキー板の愛用者、原大智選手（日大）は、銅メダルを獲得した。

会場の最前列で見守っていた藤本さんの所へ原選手が駆け寄り、2人はがっちり握手した。原選手はワールドカップ（W杯）では振るわなかっただけに、藤本さんは「まさか原がメダルを取るとは」と思ったそうだが、原選手は、藤本製のスキー板を使ってメダルをとった日本人初の選手だった。

この大会、男女合わせて出場した60選手のうち、48選手が藤本製を使っており、男子は1位から8位までの入賞者すべてが愛用者だというから「世界の顔」は、さらに広がった。

藤本さんとモーグルのスキー板を結びつかせたのは、長野五輪（1998年）後、モーグルの第一人者、上村愛子さんの「軽いスキー板が欲しい。今の板は私に合っていない」との一言だった。藤本

藤本社長（左）と原選手（藤本さん提供）

さんは中学時代から上村さんの才能を見抜き、自身が輸入、販売するゴーグルを提供し続けていた。

「オレ作ってやろうか」と藤本さんは、海外の一流選手に徹底して意見を聞いたり、専門書を読みあさるなどして、自らが考案、設計、知人の工場に製造を頼んだ。硬く粘りのあるブナ、カエデの木を交互に5枚組み合わせたスキー板を作った。“企業秘密”をいとも簡単に明かしてくれたが、「真似出来るならどうぞ」と自信をみなぎらせた。

上村さんは、W杯種目別で日本人初の優勝を果たすなどし、5大会連続五輪に出場、バンクーバー五輪（2010年）、ソチ五輪（2014年）でメダルに後一歩届かなかったが、4位入賞を果たした。藤本さんは、自信が手がけた「I（アイ）Done（デーワン）」ブランドは「identity only one」を意味し、汎字で刻印されている。このブランドが、ソルトレークシティ五輪（2002年）から平昌五輪まで、金7、銀4、銅6を選手たちにもたらせている。

藤本さんは大体大では陸上競技部男子八百メートルを専門にしていたが、仲間とスキーに行ってとりこになり、2年次からは基礎スキー部に。福田芳則副学長のゼミ生で「福田先生からは野外活動など教わることが多く、自分で考えることの大事さを知った。それがIDにつながったかも知れない」と感謝の気持ちを忘れない。

まもなく還暦を迎える藤本さん。「後継者の育成、世界のブランドを求めるか、日本のIDで良いのか」真剣に考えている。

レジェンド山本〝二刀流〟挑戦

本学の客員准教授であるとともに、大体大DASH認定アスリートの山本篤さん。夏季パラリンピックには3大会連続出場し、メダルを量産し続けるレジェンドが果敢に冬季パラリンピックに挑んだ。

事故で左足を失う前は、スノーボードの経験もあり、何より持ち前のチャレンジャー精神が彼をかきたてた。リオ五輪後の昨年1月、平昌五輪への挑戦を決意した。国内の大会、海外でのW杯にも参加したが、夏とは違う義足の使い方、ターンの技術など世界のトップ級との差は大きかった。国内の平昌パラリンピック予選を通過することは出来なかったが、国際パラリンピック委員会（IPC）の招待枠で出場がかなった。レジェンドのなせる業だ。

大会前、野田賢治理事長を表敬訪問した際「メダルには届かないと思いますが、入賞を狙いたい」とチャレンジャー精神を口にした。

厳しい大会だったが、マスコミの注目度は高かった。そんな中でのスノーボードクロス大腿障害。予選12位で決勝トーナメント進出は果たしたが、1回戦で敗退。満を持して臨んだバンドスラロームは、2回目のレース中に転倒、左肩を脱臼してそのまま棄権、病院に搬送される事態になった。

山本さんは自身のブログにこう綴っている。「けがをしてしまい、悔しい結果でしたが、この挑戦に悔いはありません。僕自身の挑戦は終りません。肩の治療を優先し、東京2020に向けて始動します」。

レジェンドは既に東京にスイッチオンしている。

大会前、野田理事長（右）、岩上学長を表敬訪問した山本さん

スノーボードを手にする山本さん

スポーツの力、五輪の精神

入社時からの目標が五輪取材でした。体育大の学生にとって、五輪は誰もが夢見る大舞台。アスリートが最高に輝く大会に報道陣としてかかわれて感慨深いです。

平昌五輪は、長野五輪以来のメダルラッシュで幕を閉じました。世界中のカメラマンが最高の1枚を撮ろうとしのぎを削る中、フィギュアスケート男子の羽生結弦選手をはじめ、スピードスケート女子500㍍の小平奈緒選手、同団体追い抜きなど、数々の金メダル獲得の瞬間に居合わせ、私の写真が読売新聞の1面や、社会面を飾りました。特に小平選手が、銀メダルに終わった韓国の李相花選手を抱きしめたシーンは、国籍も人種も政治も関係ない、「スポーツの力」「五輪の精神」そのものだと感じました。

カーリング女子のLS北見が銅メダルを獲得した場面も撮影することができました。これまで何度も取材したことがあったので、彼女たちの活躍は自分のことのようにうれしかったです。ハーフタイムにお菓子や果物を食べる「もぐもぐタイム」も話題になり、地元の菓子店が大繁盛。思いがけない地方への経済効果、北見の地名が全国に知られるきっかけになったことも五輪取材の魅力でした。

私は在学中、「OUHSジャーナル」の記者として部活動を取材した経験から報道カメラマンを志し、読売新聞社に入りました。入社後は五輪取材を目指し、多くのウィンタースポーツを撮影しました。目標を定めて準備すれば、夢はきっとかないます。何事も諦めずに全力投球してください。

【読売新聞東京本社編集局写真部
守谷遼平　2012年、体育学部卒業】

瞬間も見逃さない守谷記者（中央）

宇野昌磨を追って

2月2日から27日までの26日間、入社5年目で初めて現地での五輪取材に携わることができました。普段は大阪を中心に勤務しているため、担当は西日本を拠点にするフィギュアスケートの選手と、ショートトラック。男子で銀メダルを獲得した宇野昌磨選手はカナダやフランスの遠征にも同行し、五輪までの道のりを追いかけてきました。スポーツメディアに携わった者でしか得られない醍醐味を感じたものです。

大学時代はラグビー部に所属。OUHSジャーナル編集長の相馬卓司客員教授に、毎週のようにテーマを出してもらい、マンツーマンで作文添削の指導を受けました。冬の競技との接点は全くなく、初めはルッツ、フリップ…などジャンプの見分けから苦しみました。意識したのは「分かりやすい原稿を書くこと」。大学時代の自分でも読んでみたくなるような、選手の人柄のにじむエピソードを盛り込むことを一番に考えました。

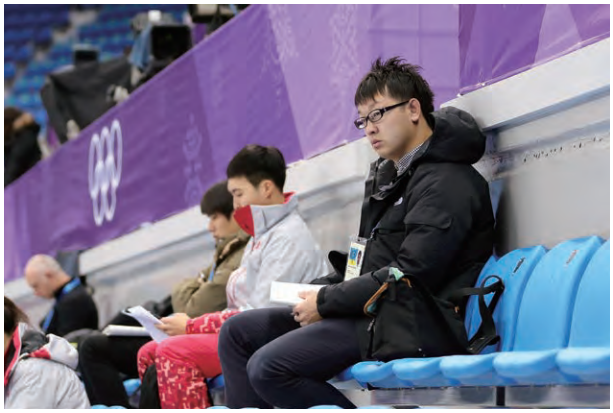
宇野選手の五輪フリー翌日の原稿の見出しは「159㌢　小さな体ででっかい銀」。出場30選手で最も低い身長の宇野選手は、小柄な体を感じさせない演技に至るまでの努力をテーマに執筆しました。

仕事における反省点は多々ありましたが、現地だからこそ得られた経験は財産です。氷点下15度にもなる環境で、バスの誘導をしていた大学生ボランティアの笑顔には、元気をもらいました。

選手の姿を1度も見えないような場所で貢献する人たちによって、アスリートが輝き、私たちの仕事が成り立つことも知りました。大体大で学んできた、スポーツを「する」だけでなく「支える」視点での気付きがたくさんありました。2年後は東京五輪・パラリンピック。さらにその2年後は冬季北京五輪・パラリンピック。自分自身も成長して、その時を迎えたいと思っています。

後に続く後輩を待っています。

【日刊スポーツ新聞大阪本社報道部
松本　航　2013年、体育学部卒業】


真剣に演技を見つめる松本記者（右）

大体大と熊取町協働協定

協定書を取り交す岩上学長（左）、藤原町長

大体大と熊取町は3月2日、本学で運動を通じた協働協定を結んだ。本学は同町の要請を受けて、本学生を派遣、町立小学校で放課後にスポーツ教室を開いたり、町立中学校の運動部の指導をしたりする。さらに町が開く健康教室で参加者の体力データの収集、分析などを行う。

1989年に茨木市から同町に移転した本学は同町と地元とのつながりを深めようと準備を進め、同町も本学の人材や、運動に関するノウハウを生かしたい意向を持ち続けており、協定調印の運びとなった。同町企画部の明松大介理事より、締結に至るまでの経緯と主旨説明、その後、岩上安孝学長と藤原敏司町長が協定書に署名した。

岩上学長は「元気な熊取町と協定を結んだことは、お互いに補完できることがあるので有意義だ。これから益々、絆を深めていきたい」と話し、藤原町長は「DASHプロジェクトに関する協働協定を締結出来たことは、私自身はもとより、町民の皆様にとっても、大変うれしく感じている。協働協定による様々な取り組みを通じて、若者から高齢者まであらゆる人がつながり、共に歩むことで町の活力を維持し、住みたい、住んでで良かった、共に作る〝やすらぎ〟と〝ほほ笑み〟の町の実現につながることを期待したい」と本学との協定地決の実現への喜びを述べた。

おわび

OUHSジャーナル214号で締結一覧表を掲載しましたが、不備がありました。改めて再掲載いたします。

大阪体育大学と府市町との連携協定一覧

	名　　称	提携年月日
1	熊取町	平成17年3月29日
2	神戸親和女子大学	平成19年1月23日
3	貝塚市教育委員会	平成20年2月20日
4	大阪府教育委員会	平成20年8月22日
5	大阪市教育委員会	平成21年7月14日
6	茨木市教育委員会	平成25年2月19日
7	高槻市教育委員会	平成25年3月18日
8	泉大津市教育委員会	平成25年6月5日
9	田尻町教育委員会	平成25年12月12日
10	高石市教育委員会	平成26年3月26日
11	阪南市教育委員会	平成26年4月21日
12	枚方市教育委員会	平成27年1月27日
13	泉佐野市教育委員会	平成27年7月15日
14	岸和田市教育委員会	平成27年11月4日
15	堺市教育委員会	平成27年11月6日
16	和歌山県教育委員会	平成28年2月19日
17	泉南市教育委員会	平成28年3月18日
18	京都市教育委員会	平成29年2月7日

活発に国際交流

香港とのダンス、ウエスティン大学との学術・文化交流、西安体育学院訪問と立て続けに国際交流があり、いずれもこれからに向けての大きな絆になった。

コンテンポラリーダンス・ワークショップ&ショーイング

ダンス国際交流

2月14日から17日まで、古典舞踊再生事業など、多方面にわたり活躍され、香港で最も有望な振付家の一人であるカイ・チェン氏を招待し、関西の舞踊研究者、先生、学生、高校生を対象とした大学間の国際交流事業として、コンテンポラリーダンス・ワークショップ&ショーイングを開催した。各日3時間の講習会では、主に、ローリングムーブメントの実践を通してその知識と、技能を習得した。

ローリングムーブメントとは、とても簡単に説明すると、床を転がりながら踊る動きである。例えば、水の入ったペットボトルが床で転がるように、身体の重心を丁寧に変化させながら、転がる方法だ。実際にやってみると、人の身体は丸く、柔らかいようなイメージだが、予想外に肩や腰が角張っていることがわかる。参加者の多くは、はじめは苦戦していたが、各々ゆっくりと丁寧に自分の身体と向き合い、身体をローリングする感覚をつかめたようで、身体の感覚を研ぎ澄ます時間となった。

最終日のショーイングでは、日本のイメージ『枯山水』を題材に、カイ・チェン氏が演出したワークショップ作品の他、大阪体育大学ダンス部の作品、カイ・チェン氏の古典舞踊作品が上演され、成功裏に終了することが出来た。この事業を通して、筆者自身も舞踊の知識が技術のみではなく、国際交流の経験から得られる多様性への意識は、今後の教育や研究において、大変重要であることを実感した。

【ダンス部監督、体育学部准教授　白井麻子】

チェン氏（左）と息を合わせる筆者

ウェスタン大と学術・文化交流

「パブリック・ヘルス拠点づくり～地域に根ざす健康づくりの展開と健康増進に関する研究推進のための地域支援について～」と題した国際シンポジウム、パネルディスカッションが国際交流を結んでいる、カナダのウェスタン大学からクララ・フィッツラルド氏、高齢者への運動介入研究を実践している京都学園大学、吉中康子教授を招き、パブリック・ヘルスの拠点づくりを目指すシンポジウムとパネルディスカッションが3月2日、本学で開かれた。

フィッツラルドさんは支援する立場としての「ウェスタン大学―高齢者がよりよく年を重ねていくための研究、知識の活用、プログラム―」について同大学の高齢者に対しての取り組み方紹介、吉中教授は「高齢者におけるフレイル・サルコペニア・介護予防」として、運動を中心にしたプログラムの介入効果について話した。

大体大と熊取町の協働協定締結式を挟んで、本学の浜田拓教授が「運動が乳酸代謝を高める効果、脳機能亢進の可能性」を言及した。

最後にパネルディスカッションを行い、フロアも交えて活発な意見が出された。

熱心に討議するパネラーたち

32年の歴史と重み

西安体育学院と交流

「日本大阪体育大学代表団のご来訪を熱烈に歓迎致します」

大学正門から見える鮮やかな日本語の文字が我々を迎えてくれた。

3月12日から16日まで、梅林薫全学国際交流委員長、植木章三教育学部学科長、白井麻子体育学部国際交流委員長、曽根国際交流委員が西安体育学院を訪問した。それに加え、今回はダンス部の学生14人が同行、実に28年ぶりの学生交流が実現された。

13日、日中の国旗を掲げたテーブルに文副院長と本学教員と学生達が対面。その後外へ出て晴天のもと植樹式が行われた。西安体育学院の教員や、学生たちが集う最も美しい憩いの場所に日本の桜を「友誼之樹」として植樹していただいた。

14日は植木先生が障害者教育について講演、午後には学生と教員の交流、部活動交流、共同研究についての意見交換がなされた。この日学生たちは、白井先生のもと通訳なしでの日中の合同練習を行ない、その演技を披露してくれた。西安の演技は、手のひらと指先の動きが繊細で、身体全体をしなやかに流麗に一糸乱れず舞っていたのが印象的だった。一方、大体大の演技は、人間の内面を表現し、静と動を織り交ぜながら、独創的な世界観で披露してくれた。最後は両大学合作のパフォーマンスを創り上げてくれ、終了後学生たちが歓喜し、たたえあっている光景を目の当たりにしたとき、国際交流の意義を改めて認識させられた。

15日夜には、本学と初めて学術交流の締結をしてくださった文先生（元院長）が88歳のご高齢にもかかわらず、わざわざ我々の夕食会に出向いてくださった。1990年に西安を訪れた梅林委員長は28年ぶりの再会となり感動的な夕食会となった。文先生は我々若い教員と学生たちにも温かい激励のお言葉をかけてくださり、帰り際まで私たちを厚く遇してくださった。この夜は、訪中団にとって32年の交流が、どれほどの歴史と重みがあるのかを改めて実感させられる契機となり、心に刻まれた忘れ得ぬ一日となった。

本年5月には西安体育学院より朱院長をはじめ、7人の先生方が学術交流の調印式のため来日する。32年の交流は、長い歳月をかけて紡いできた本学の誇れる歴史であり、継承すべき両国の友好の証でもある。是非、本学の先生方とともに交流を継続していきたい。

【体育学部准教授　曽根純也】

西安体育学院の教員と、大阪体育大学の教員と学生

西安体育学院と大阪体育大学のダンス交流

「友誼之樹」として日本の桜を西安体育学院内に植樹

これからの子どものスポーツ環境を考える

スポーツフォーラム

本学社会貢献センター、公益財団法人ライフスポーツ財団共済のスポーツフォーラム「これからの子どものスポーツを考える」が3月11日、大阪市のあべのハルカスに約100人の聴衆が参加して行われた。

福田芳則副学長が、岩上安孝学長の「青少年のスポーツ活動を支える屋台骨である学校の運動部活動に大きな問題がなげかけられている。東京五輪を機に日本のスポーツ界も世界基準で考えることが求められる中で、幼少期のスポーツ活動がどのようにあるべきかを、改めて考える時期にさしかかっているのではないか」のあいさつを代読。

東京学芸大の吉田伊津美教授が「これからの子どものスポーツ・スポーツ環境を考える」と題して基調講演、文部科学省の幼児期指針作成のワーキンググループメンバーの一員として指針づくりに貢献するなど、幼児期の子どもたちの運動のあり方についての第一人者らしいスピーチをした。

次いでディスカッションに移り、本学体育学部の三島隆章准教授が「発育発達の視点から」、同小林博隆准教授は、和歌山県内で調査したデータをもとに「部活動のあり方」、ライフスポーツ財団の河原慶子理事兼事務局長が多彩なデータを使って「幼児期の運動・スポーツについて」述べた。

この後本学の中山健准教授がコーディネーター、3人のパネリストは、幼児期から少年期の子どもたちにとって、どのようなスポーツ環境が望ましいのか、活発な議論を重ねた。

陪席した財団の常務理事、細川磐本学名誉教授が「子どもは遊びの天才、子どもたちの声を聞けば社会が分かる。その子どもたちが地域で遊べる環境があるのか、環境づくりが大切だ。いつでも、どこでも、だれでもが出来るのがスポーツ」と感想を述べ、社会貢献センター長、冨山浩三本学教授が「子どもたちは何を伝えようとしているのか。幼児には遊びを通じて多様なものがみえる」と締めくくった。

最後に財団の清水進理事長が、財団が果たしてきたもの、理念の実現などについて話し、閉会した。

細川常務理事（左）と3人のパネラー

吉田教授の基調講演を聞く参加者

大体大と大阪タカシマヤが初コラボ

シニア世代を中心に体力測定

本学と大阪タカシマヤ（大阪市中央区）がコラボレーション、17年10月25日から30日までの6日間、「Let's スポ活」をテーマにしたイベントが初めて開かれた。2日目の26日は、本学スタッフが買い物客などの体力測定を行った。

体力測定は「大体大DASH元気ラボ」として、体育学部の下河内洋平教授、三島隆章准教授らが監修したスマートフォン健康アプリ「クオリティ」「シニアクオリティ」を使い、開眼片足立ち▽垂直跳び▽ステッピングテスト▽タイムドアップ&ゴーの4種類をわずか5分足らずで測定完了。

会場には多くのシニア世代が訪れ、81歳の女性は「週2回プールに通っているが、立ったり、座ったりで使う筋肉はまた別だと知った。これをきっかけに足を鍛えるトレーニングを始めたい」と話し、刺激を受けた様子だった。

会場では監修者の三島准教授が「カラダがよく分かる」授業を行い、参加者は日ごろ直接学ぶことが少ないスポーツ科学の講義を、メモを取りながら熱心に聞き、筋肉の仕組みや、運動の能力についても学んでいた。

講義を聞いた70歳の男性は「私たちにも分かるように話してくれ、筋肉が大事なことが改めて良くわかった」と早速、日常生活に取り入れたいと意欲的だった。

本学のスタッフは6日間のイベントで、様々なエクササイズ体験や、アスリート食を楽しめる機会を提供、学生たちはゲーム感覚で楽しみながら学んでいた。

「カラダがよく分かる」授業をする三島准教授

地域公開講座、教育講演会開く

障害児・者の正しい理解と適切な支援を

教育講演で参加者に説明する笹森洋樹さん

特別支援教育、教育講演会「障害児・者の正しい理解と適切な支援を」に、地域公開講座が3月3日、本学で開かれた。講座は4部構成で行われ、教育関係者ら74人、学生を含む114人が参加した。

第1部は、我が国の発達障害者研究の第一人者と言われる笹森洋樹氏（国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員、発達障害教育推進センター長）が「通常の学級における特別な教育的ニーズのある子どもの支援～発達障害を中心に～」をテーマに教育講演を行なった。

笹森氏は最新の学習指導要領を始め、行政が行なっている最新の取り組みを紹介しながら、現状や、教育現場で課題となっていることを参加者と共有した。発達障害の子どもたちの支援について「診断の結果で支援が必要なわけでなく、置かれている状態によって支援が必要か決まると考えることが大事だ」と述べた。医療の力よりも大事だと考えるのには「診断がつくか、つかないか分からないグレーゾーンの子どもたちの支援が、見過ごされがちなのが問題」と大事な考え方を裏付けるデータと視点を示した。終盤には参加者と現場で起こりそうな事例から、「どうして問題が起きたのか」などを一緒に考え、どう対処すべきかなどを全員で考える時間が設けられた。

第2部のランチセッションでは、安田友紀講師（神戸女学院大講師、大体大非常勤講師）が指導するDance Assemble アマカマ・ドゥによる「ラフレシア～ひとくい花～」の創作ダンスが披露され、昼食を取る参加者の講演間のひと時に、華麗なダンスで魅了し、笑顔を届けた。

第3部は、平峰厚正教諭（熊取町立南小学校通級指導教室担当教諭）が「褒めることは大切だが難しい―生徒指導、支援教育、人権教育担当者との連携―」をテーマに教育実践報告が行われた。同教諭は現場で働く中で、実際にあった失敗事例や、問題を解決するために行っている取り組みを紹介。参加者は肌感覚の近い登壇者の話にうなずきながら、真剣に聴いていた。また、現場で働く中で「各児童の特徴、褒める際の言葉や、タイミングの情報共有をしていくことは大事だと感じて、実際に取り組み始めている」と現場で得た気づきを生かした取り組みの事例を紹介した。講演中「褒めることは大事だが、結果だけではなく過程を伝わりやすく褒める」と何度も言って、強調していた。同教諭は指導する側の努力が重要だと諭している。

本学安田友紀講師の指導するアマカマ・ドゥのダンス

第4部ではボッチャ日本代表のコーチである、本学教育学部の曽根裕二講師、大体大在学時にボッチャのインカレで優勝した神門啓介教諭（大阪市立矢田中学校講師）が「生涯教育としてのボッチャの可能性」をテーマに大学からの報告を行った。ボッチャという競技の説明、特性、競技誕生の背景から、生涯教育としてのボッチャの高い可能性を語った。脳性まひの人が参加できるスポーツとして誕生し、投げ方のルールの柔軟性なども生涯教育としての可能性が高いことを伺わせる。東京パラリンピックでは、曽根講師率いる「火の玉JAPAN」が金メダルを目指す。

健康福祉学部、地域公開講座最終回

100人を超す参加者

健康福祉学部主催の地域公開講座「学んでみよう〝当事者研究〟―べてるの家の皆さんをお迎えして―」を10月9日、本学中央棟大会議室で実施した。当事者研究とは精神障害のある当事者が、自分が抱えている困難や苦労を自発的に研究し、仲間と共有して生きづらさをなくしていこうという新しい実践活動であり、精神医療福祉にとどまらない多領域で、また海外でも注目を集めはじめている。

この第一人者である北海道医療大学の向谷地生良先生、そして〝当事者研究〟発祥の「べてるの家」の当事者の方々に、ご講演と〝当事者研究〟の実際をお願いした。

この講座は、本学で精神保健福祉、社会福祉を学んだ卒業生、そしてお世話になった実習施設の皆様、当事者の皆様、さらには地域の皆様とともに有意義な学びの場をつくろうと企画したものだ。

やはり本テーマへの関心度が高く、100人近くの皆様が申込んでくれた。講演と〝当事者研究〟の会場は、時に笑いがあふれ、時に〝そうだったのかー〟と腹の底から納得できたという顔、顔、であふれ、一同が引き込まれていったのがよく伝わってきた。アンケートではほぼ全員から「大満足」という評価をいただいた。

熱心な当事者研究

今回は講演会、親睦会の司会を卒業生に担当してもらい、準備でも大いに手伝ってもらった。内容、取り組みともに健康福祉学部主催地域公開講座の最終回にふさわしいものになった。大学関係者の皆様のご支援に感謝いたします。【前健康福祉学部長 板原和子教授】

退官教授最終講義

体育学部、荒木雅信教授、教育学部、和田隆夫教授がそれぞれ形は違うが、熱い最終講義をした。両教授とも花束を贈られたり、労を労われたりして感慨深そうだった。

大体大のブランドレガシー 荒木教授

講義中の荒木先生

荒木教授は1月13日、L201教室で大勢の教職員、卒業生、学生らを前に淡々と話した。

多くの研究を重ねる中で特にこだわったのは、一流選手のデータの収集だったという。「一流選手が脳や心で処理している心理状態の測定と分析をすることで、目標値を客観的に得ることが出来、真の心理サポートをするための基準となる指標になると考えたから。データがあったからこそ、自信を持ってサポートできる基準になった」と言う。

さらに学生たちに伝えておきたいこととして「得た知識はフィールドで実践しなければならない。スポーツの場面は一度として同じ状況はない。フィールドでの実践は学びの場だ」を強調、「スポーツ分野を学んでいる学生として、1938（大正13）年という年を覚えておいてください。体育科学研究の基礎が始まった年」だからだそうだ。体育心理だけではなく、体育に関する諸科学を研究し、その中の一分野として心理学が研究されたていた。

大体大のブランドレガシー。「世に類を見ないことを創造し作り出していく。大体大は常に『世にないもの』を考えて作っている。それがプライドだ。『生産体育』という言葉を大体大で発見、魅力を感じた」。大体大力となって脈々と引き継がれている。大体大は常に新しい、時代の変化に柔軟に対応している。スポーツ心理学専門のコースが出来た時には驚いた、と刺激的だった当時を振り返った。

「カウンセリングマインドを持った教員を育てたいと願い、スポーツ心理学コースが出来た。日本にはないコースでプライドと自覚を持って学んでほしい」と学生にエールを送った

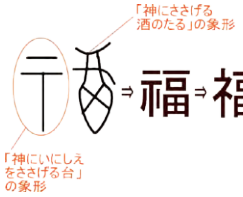
法と道徳のロマンティックな関係 和田教授

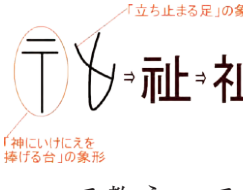
講義中の和田先生

和田教授は学内での「最終講義は柄に合わない」と固辞したそうだが、同僚の教員の熱い情熱に押され「こじんまりした所で」と、3月3日、大阪体育大学同窓生会館、アネックスで自身のサークル仲間、ゼミ生たちを前に〝最終講義〟をした。「法と道徳のロマンティックな関係～ルールとしあわせ～」という法律家で常にロマンを求める和田教授らしいテーマで話し出した。

和田教授によると、元来、法律の法と言う字は「灋」と書いたそうで、シ（さんずい）は水＝公平＝を意味し、廌は伝説上の動物で「タイ」と呼ばれていた。「うそをつくと、タイが去る」と言われ、法は公平と正義から成り立っていると話した。

今、改憲への動きが加速しており、「第9条に自衛隊を明記するか否か」がポイントだが、第13条のすべての国民は、個人として尊重される。個人は漠たるものではなく、自立的意思を持った者を示すとされている。また法と道徳の関係では「道徳を法に入れるかどうか」は意見の分かれるところで、すべてを法制化する動きもあるという。前近代は法と道徳が未分離、近代は法と道徳が分離されている。





福祉の元の文字についても触れ、漢字、漢和語源辞典によると福祉の文字は図のように変化している、と和田教授。

説明するときは少年のように目が輝いていた。和田教授は1年間特任教授として、講義を受け持つ。

ケルン体育大で在外研修

17年5月12日から9月10日までの約4カ月間、ドイツ・ノルトラインヴェストファーレン州にあるケルン体育大学での在外研修の機会をいただいた。同体育大学は多くの日本の大学と協定関係にある大学で、今回ご指導いただいたクリストフ・ブロイアー教授（副学長）は、何度も日本で講演されている先生。

今回の訪独の一番の目的は、私のこれまでの論文を「社会的インパクト」というコンセプトでまとめ直すことだった。ドイツは地域スポーツ先進国で、スポーツがどのように社会的インパクトをもたらしているかについて理解するには最高の環境だった。スポーツは、参加者個人に対する身体的・精神的な効果があるのに対して、地域にスポーツクラブやプロスポーツチームが存在することで、人々は地域への愛着を深め、人間関係が深まる。今回は、このような視点で研究を進めることが出来た。

また、この機会に是非ドイツのスポーツクラブを体験したいと思い、地域のフォークダンスクラブに参加させていただき、週1回、約1時間、フォークダンスをした。体育の授業で経験するオクラホマミキサーなどは有名だが、今回はフォークダンスの奥深さについて知ると共に、活動が終わったら、テラスでビールを飲むというクラブ文化についても経験することが出来た。また、地元のサッカークラブFCケルンの試合を2試合観戦した。FCケルンのレディースチームには、本学の卒業生も所属していて、クラブの様子なども聞くことが出来た。本学と同体育大学との関係がさらに深まることを期待している。

【体育学部教授　冨山浩三】

フォークダンスクラブはいつもは10人くらいで
学校施設を借りて活動する小さなクラブ

思いでの根子岳ツアー

スキー実習

平成29年度スキー実習が、2月6日から10日まで4泊5日の日程で、長野県菅平スキー場にて開催された。今年のスキー実習は天候に恵まれ、夜の間に雪が積もって朝になると快晴という、絶好のコンディションの中で開催された。

夜の講義では、本年度で退職される宍倉保雄先生にご参加いただき、体育大学での実習の意義や、スキー実習の思い出などについてお話をいただいた。これまでの先生方にスキー実習のお話をいただくと、必ず聞かれるのが根子岳ツアーのお話である。実習でツアーに取り組んでいた際には、事前研修で一度、下見で一度、そして本隊とともに根子岳に登り、1回の実習中に3回は登ったなどという話が楽しそうにお話しいただくと、根子岳ツアーが先生方にとって大きな印象を残していることに気づかされる。

また今年は実習中、北陸地方が大雪に見舞われたため、実習で安全の講義をお願いしている水澤先生の到着が一日遅れることとなった。こういうときに偶然は重なるもので、スキー実習副主任の菅生貴之先生がJISSに勤務していた際にサポートをしていた、モーグルのオリンピアン・畑中みゆきさんが菅平に来ていることがわかり、急きょ連絡を取って講義をお願いしたところ、快くお引き受けいただいた。オリンピックに出場されるほどの選手のお話は、本学の学生の心にスムーズに入っていくようで、学生達は食い入るように聞いていた。

【スキー実習主任、体育学部教授　冨山浩三】

スキー実習開講式

スポーツキャンプおお賑わい

参加者、笑いや拍手も

OUHSスポーツキャンプ2018は、約120人が参加、2月25日本学で行われた。15回目を迎えたイベントはすっかり地域に根ざし、早春の風物詩になっている。

サッカー（小学生）、テニス（小学生）、ダンス（未就学児から小学生）、健康増進（50歳以上）の4つにグループ分け、専門の教員や学生が、種目別に指導にあたり、企画運営は学生が行った。時折雨の降る中でのキャンプだったが、参加者たちはスポーツを楽しみ、あちこちで歓声があがるなどして、心地良い汗を流していた。

午前中は基礎中心のエクササイズ。それぞれの競技場、体育館で教員や学生のお手本を見ながら、真剣になりながらも、楽しそうに取り組んでいた。笑い声や拍手が聞こえ、2時間たっぷりトレーニング、身体づくりをしていた。

昼食を挟んで午後は、実践練習を中心に、試合をするところもあった。またダンスは照明を使った本格的な発表会を披露、午前中にしっかり基礎を学んだ幼児、小学生たちが素晴らしいパフォーマンスで会場を魅了した。

覚えたてのダンスを披露する幼児、小学生たち

くまとりロードレースに1100人

松葉杖の川合さん、海外からも

毎年恒例、熊取町の風物詩である、くまとりロードレースが、3月4日行われた。海外からの参加者もあり、約1100人が参加、熊取町の季節を満喫できる緑豊かなコースを駆け抜けた。

走行ルートは本学陸上競技場をスタート地点に、「水源の森百選」「大阪みどりの百選」に選ばれている永楽ダムを周回する。傾斜がきつく、本学の学生が部活動のトレーニングで走るほどで、走りごたえのあるコースだ。

今年の大会にも、昨年を上回るほど〝感動の挑戦〟があった。昨年、3キロ健康ジョギングコースに参加した片足の松葉杖ランナー、川合裕人さんが、クォーターマラソンに挑んだ。川合さんは日根野駅近くで、うどん店を経営しており、アンプティサッカーや、パラスポーツの活動も行っている。川合さんは「自分は障がい者であって障がい者ではないという気持ちで過ごしている。障がい者、健常者関係なく片足でも走れるぞ！ということを証明したかったし、完走する姿をみんなに見てもらいたかった。引きこもり気味だった昔の自分みたいに、色んな障がい者の人に、一歩踏み出す勇気を与えたい。一歩踏み出せば見える世界は変わるということを伝えるために挑戦した」と今回への思いを語った。

大体大と熊取町の地域交流の一翼を担っている、くまとりロードレースは、今年で28回目を迎えた。本学は約半数の大会で施設提供をしており、大会を通して熊取町への社会貢献を行なっている。本学の学生たちが、大学で学んだ知識を生かし、実践の場として参加できるのもくまとりロードレースの良いところだ。大会運営の面で、沿道、着ぐるみ合わせて30人の学生ボランティアが活躍し、ランナーの身体的なケアでは、本学アスレティックトレーナーチーム、ブルーベアの部員21人が無料でアイシング、ストレッチを行った。

戸隠の自然に感謝

キャンプ実習

キャンプ実習は9月25日から29日の日程で行われた。毎年、参加者は20人前後だったが、今回はついに6人となった。4年生のこの時期、ニーズ等、考えさせられる。しかし、今年度の4年生からは選択必修の学年となり、履修者の大幅な増加が見込まれることから、ここ戸隠で実施するキャンプ実習は、おそらく今回が最後になることと思う。

実習は、例年お世話になっている外部講師の吉田理史先生（NPO法人SOUP）と、今回は本学から手塚洋介先生にご協力いただいた。今回は少人数だったことから、少人数ならではのプログラム内容を取り入れた。1日目の夜は全員で火を囲み「セルフヒストリー」を行った。「セルフヒストリー」は自分のこれまでの人生を語るプログラムで、キャンプの初日に行うことで、お互いを理解した上で、キャンプを進めることが出来る。大人数であったり、ふざけたりするような雰囲気になるとうまくいかないが、今回は誰もが素直に自分自身を語り、また周りがそれを受け止める雰囲気が出来ていたので、とてもいいスタートを切れた。

お互いのことを理解した上で、2日目の課題解決プログラムであるASEは6人で試行錯誤しながら、さらにグループの凝集性が高まった。メーンプログラムである3日目の飯縄山登山では、飯縄山に詳しい吉田先生を先頭に、植生やキノコ、戸隠地方に関する話を聞きながら全員で登った。これも少人数だからこそ実現した。山頂での景色も素晴らしく、下山後の温泉は格別だった。最後の夜のキャンプファイヤーはみんなの心のこもった時間となった。

今回は少人数だったことから、全体的に教員と学生の距離がとても近く、多くのプログラムを共に行い、共感することが出来、集大成のような実習だった。2011年から7年間続いた戸隠でのキャンプ実習が、事故やけがも無く無事に終われたことを関係者の皆様、そして戸隠の自然に感謝したいと思います。【キャンプ実習副主任、体育学部准教授、伊原久美子】

キャンプファイヤー

山頂の実習生

女子バスケASEに挑戦！

【バスケットボール部女子監督　村上なおみ、体育学部准教授　伊原久美子】

ASEとは野外教育の分野で活用されているチームビルディングで、Action Socialization Experienceを略した言葉だ。ASEとは、1人では解決できないような肉体的・精神的課題に対し、メンバー一人一人がそれぞれの能力を出し合い、協力しながらその課題を解決する活動である。

11月3日、インカレ目前の本学女子バスケットボール部の部員38人に対してASEが行われた。1班が7～8人となるよう5班を編制し、5～7つのアクティビティに（課題）に挑戦した。終了後の参加者からは、「1人がやる気がなかったり、下を向いていたら絶対にクリアできないし、チームの雰囲気が崩れてしまう」、「うまくいかない時、気持ちに余裕が無い時こそ、視野を広くして自分をコントロールしていきたい」などの多くの気づきが報告された。

ASE後のチームは、活動を通して得た気づきや、課題を常に意識しながら練習に取り組み、全員が役割を全うしようとする姿勢が顕著に表れていた。インカレを目前にしてチームの要であった主将がけがのため戦線離脱を余儀なくされ、1回戦もどうなるかわからない状況の中、チームは今シーズン一番の団結力をみせ、ベスト8の目標には届かなかったものの、それ以上に価値あるものを得ることができた。今回ASEに挑戦し、野外教育と競技スポーツとの共通点を見いだせたことに加え、コート上では育成に時間を要する部分にも短時間で切り込むことができたと感じている。今後も、チームの成長を促す一助として、継続的に取り入れていきたい。

女子バスケ、くもの巣の様子

女子バスケ、ビームの様子

1、2年生キャリアフェスタに真剣

1、2年生を対象にしたキャリアフェスタが、2月5日行われた。「来年の目標、卒業後の目標を考えてみる」を共通テーマに、1年生は「将来について考えよう」、2年生は「先輩（4年生）から「社会」を感じよう!!」を副題に、講師の話を聞いていた。

1年生は2組に分かれ、大阪府立茨木工科高（定時制）保健体育科の津本武海教諭（本学46期生）の「人としての成長」、スペインやオーストリアでプレーした元プロサッカー選手で、サッカー留学や、エージェント業務などをするAMUSEMBNT FUT LLCの松澤憲伸さん（同44期生）の「挑戦 Challenge」～自分自身と向き合い挑戦し続ける～を熱心に聞いていた。

2年生は今春卒業で、就職が内定しているOB、OGから教員、会社員や、警察、刑務官、消防士など15ブースの内、4ブースを選び、先輩たちから就活や入社するための勉強法など、より具体的な話を聞いた。就職内定の卒業生だけを迎えてのキャリアフェスタは初の試みで、学生たちにとってはより身近に感じられるだけに好評だった。

話しをした長尾美空さん（体育学部、大阪府警）は、「後輩たちには、夢をかなえて欲しいという気持ちと、自分も春から頑張っていこうという気持ちがより一層強くなった」と語り、間口祐樹さん（健康福祉学部、アイケイケイ）は「興味がもてそうな話しをしなければと、自分にも良い勉強になった。人に自分のことを伝えることは難しかった」と感想を述べた。

熱く語るOB

刺激を受け、新たな行動に

体育学部2年　多久真純

私はキャリアフェスタで先輩たちの話を聞いて、職業選択の視野が広がりました。本学で得た知識や、スキルを生かせる職業が良いなと考えていました。

ところが、教職教養の授業を受ける中で、教員一本と考えていたため、他の職業には目を向けませんでした。キャリアフェスタでは、4つのブース回ることができたので、初めて就職について、しっかりと話を聞けました。

企業はデスクワークというイメージが強かったのですが、自身も体を動かしつつ体大で得たスキルを生かし、人に影響を与えられる仕事は多くあることを知りました。ある先輩は、子どもに幼少期から様々な運動スキルを身につけさせるお手伝いをする、幼児体育研究会に就職されました。子どもが懸命に跳び箱を跳ぼうとするビデオを見て、出来ない悔しさを、出来る楽しさに変える、とても素敵な仕事だなと感じました。

最も印象に残ったのは、勉強をした量は自信につながるということです。教採に現役合格した先輩は、毎日ノートに解いた問題を書き、教採までにノート15冊分になり、その厚みが自信となり、実力を発揮出来たそうです。私は授業で教採の話を聞くたびに、焦りを感じていました。参考書を買い、ノートで問題を解きましたが、毎回三日坊主でした。内定した先輩のリアルな話を聞き、刺激を受けたことは、新たな行動を移すチャンスだと思います。

自分自身を見直す良い機会

教育学部1年　栃尾虎太郎

キャリアフェスタで、大阪体育大学の卒業生のお話を聞いて、自分の将来について考え直す機会となりました。現役の保健体育教師である津本武海さんのお話からは、「大学生活はどうだったか」「学業成績はどうだったか」「どのような経緯で教師になったか」などを聞き、どんな人が教師になれるのかを学ぶことが出来ました。中でも一番印象に残ったのは、教師になるためには人間性が大事であるということです。良い先生である前に、良い人間でなければならず、今から人間として成長しておくことが大切であるという話は、将来教師になりたいと考えている私にとって自分自身を見つめ直すきっかけになりました。

また、成長するための具体的な話を聞けて、これからの大学生活で意識していかなければならないことを、学ぶことが出来ました。次に、現在サッカー関係の仕事を運営する傍ら、ジョーキーボール日本代表でもある松澤憲伸さんからは、自身の経歴を聞き、行動力に驚かされました。「将来の夢があり目標がある人は、とりあえず行動すればいい。そしたら何か見えてくる」という言葉はとても印象に残っていて、これから自分の目標に向かって行動してみようという勇気をもらえました。

お二人の話で共通していた出会いを大切にすることや、人を大切にするということを忘れず、これからの大学生活を将来の夢に向けて頑張っていこうと思います。

谷さん大体大から世界へ！

競技エアロビック日本一

11月4日、5日に開催された、第34回全日本総合エアロビック選手権大会のシニアトリオの部に谷夏見さん（体育1年）が出場、シニア（16歳以上）のカテゴリーになって3度目の全日本総合で、初の日本一に輝いた。

今大会の結果で、4月に行われる「スズキワールドカップ2017第28回エアロビック世界大会FIG World Cup Series Tokyo International」と、6月にポルトガルで開催される世界選手権に日本代表としての出場する権利を獲得した。

谷さんがエアロビックを始めたのは、父の知人から競技エアロビックのDVDをもらい、見たことがきっかけだという。母と一緒に遊びのクラスからスタートしたが、みるみるうちに成長し、小学校6年生になる頃には、世界大会で3位になるほどの実力者になっていた。幼少期から輝かしい成績を残していたが、大会出場カテゴリーがシニアになってからは日本一になれずにいた。

初めてのシニアでの全日本総合は3位、昨年は腰に大きなけがをして、大会すら出られない悔しい思いをした。迎えた今年の大会。地区予選で大差をつけられていた準優勝チームに勝利し、悲願の日本一に輝いた。

「エアロビクスでは？」と疑問の声が上がりそうだが、競技として行うものはエアロビック、エクササイズなどで行うものがエアロビクスと棲み分けされている。エアロビクスから想像できるのは「緩い競技」。ところが実際は違う。迫力あるアクロバティックな大技から、バレエのようなしなやかな動きを織り交ぜ、1分20秒間演技をする激しい競技だ。試合の勝敗は減点方式と加点方式の両方で得点を競う。演技の完成度、技の難易度はもちろんだが、小さなミスが得点に大きく響く。

谷さんは週5日、熊取町内のひまわりドームで、母が指導しているエアロビック教室で練習している。日本代表選手にまで育てた谷さんの母は、競技者として進む娘を全力でサポートするべく、指導者側に回ったのだ。本学では「食事管理やトレーニングの方法など、競技に生かせることを学んでいる」と新たな知との出会いに喜んでいた。

ますます成長が楽しみな谷さんだが、エアロビックはマイナー競技ゆえの厳しい現状がある。日本代表やトップ選手になっても、国際大会の移動費、宿泊費などすべて自前。谷さんは「お金がかかり競技を続けられず、やめて行く人は多い」と言う。厳しい現状に立ち向かい、「エアロビックは表現するスポーツなので、私の演技を見てエアロビックに魅力を感じて、競技を始める人が増えるような表現者として憧れられる選手になりたい」と谷さんは競技を続ける理由と目標を語った。

表彰を受けたメンバーと谷夏見さん（左）

雨伝節来～夢つなぐ～

第50回雨山祭

今回は第50回という記念であり、節目となる雨山祭だった。今回は、「雨伝節来～夢つなぐ～」をテーマのもと10月28、29両日にわたって開催された。テーマの意味は、雨山祭の伝統を引き継ぎ、未来の雨山祭の節目となる50回目の学園祭で、関係者だけでなく来ていただいたすべての方々に楽しんでもらい、快く過ごしてもらいたいという実行委員の夢を、これからの雨山祭につなげていきたいという思いが込められている。

初日は悪天候の中だったが、天気も耐えてくれて最後まで予定通り、企画を行うことが出来た。しかし、最終日の29日は企画が始まって約30分後で雨風ともにすさまじくなり、泣く泣く屋外ステージと模擬店を中止しせざるを得なくなった。ただ、大阪体育大学浪商中学校高校体育館で行われたET-KINGのライブは大成功をおさめた。

開催するにあたり、様々な形でご協力、ご協賛してくださった関係者の皆様や、毎年私達実行委員をご指導ご鞭撻してくださり、サポートしていただく教学部をはじめとする教職員の皆様に、雨山祭実行委員会を代表し厚く御礼申し上げます。皆様方のご協力があってこその雨山祭大成功でした。

今回の実行委員は22人で、部活に行きたい気持ちを押し殺し、『プレハブ』で5月から半年間準備に当たった。「どうすれば成功し、観客を楽しませることができるか」。毎日夜遅くまで話し合い、試行錯誤を繰り返す日々を送った。

実行委員の頑張りが実り、無事雨山祭を自分達らしく成功に結び付けることが出来た。雨山祭に深く関わることができたことを幸せに思っている。

【第50回雨山祭実行委員　体育学部3年　笠原和希】

雨山祭をやり遂げた実行委員たち

巣立つ633人、院修了式、学部卒業式
～フィナーレ健康福祉学部～

平成29年度大学院修了式、大学卒業式が3月17日、スターゲイト関西エアポートホテルで行われ、合わせて633人が巣立った。＝写真＝

岩上安孝学長から、大学院博士後期課程修了生4人、博士前期課程修了生20人、体育学部卒業生474人、健康福祉学部卒業生135人に学位記・卒業証書が授与された。続いて各賞の表彰があり、大島鎌吉賞はデフリンピックの水泳競技で活躍した金持義和さん（博士前期課程）に、団体はハンドボール部女子8人、同奨励賞はアルティメット部女子3人がそれぞれ受賞、加藤橘夫賞は、学業成績全学で1位の木村直人さん（健康・スポーツマネジメント／アスレティックトレーニング）が受賞した。

またスポーツ優秀賞は、サッカー部13人、ダンス部3人など10クラブ48人に贈られた。学業優秀賞は川端龍志さん（スポーツ教育／体育科教育）ら体育学部14人、健康福祉学部は辻本黎明さんら4人が受賞、同功労賞は大西飛翔・前学友会会長ら学友会3人の他、チームを陰で支えたハンドボール部など4クラブ6人、計9人が受賞した。優秀論文賞は博士前期課程は藤田将弘さんら3人。

岩上学長は、卒業生だけにかかわらず、家族みんなに敬意を表し、最後の卒業生になる健康福祉学部の学生には「福祉系教育に力を注ぎ、15年の歳月の中で、1500人を超える人材を育成してきた健康福祉学部が29年度をもって幕を下ろすことになる。福祉の心を受け継ぎ、今後の教育に生かしていきたい」と思いやった。

同窓会の長家秀博摂泉会会長が祝辞を述べ、学生を代表して海野誠学友会会長が送辞、卒業生を代表して藤田将弘さん（大学院）、木村直人さん（体育学部）、辻本黎明さん（健康福祉学部）がそれぞれ謝辞を述べた。

窓

◇◆春は出会いの季節であり、別れの季節でもあります。3月17日の卒業式で大学院、大学合わせて633人を送り出し、今日2日は、736人を迎える入学式です。野田理事長が冒頭のあいさつで書かれていたように「4年間はあっという間」です。◇◆創部から監督を務めて11年になる、軟式野球部女子からも6人を送り出しました。緊張の塊みたいだった1年生は、やがて後輩を迎え、最上級生としてチームを引っ張ってくれました。と同時に、進級の度合いに合わせるかのように、監督である僕にためぐち。「ためぐちもリスペクトのひとつだ」と勝手に解釈して、不愉快な思いはまったくなく、受け流すことが出来るのです。「監督はいじられてなんぼ」の哲学が、いつの間にか身についてしまいました。◇◆総じて大体大生は、連帯の意識が強く、後輩は先輩を敬い、先輩は後輩たちを慕ってくれます。今日晴れて入学された皆さんも、やがて「大体人力」がつくはずです。「春や春・・・」

【相馬卓司】

コラム

ボーシャー　教育学部特任教授　和田隆夫

人の情け

民族に神話や伝説があるように家族にも世代をこえて語り継がれる物語がある。

私の家系にもある。

祖父、松之助のこんな話が伝わっている。彼は明治七年に伏見の庄屋の嫡男として生まれた。まだ秘やかに残る鳥羽伏見の戦いの硝煙を吸いこみ、血なまぐさい話を聞きながら育った。

家は幕末から明治の激動のなかで徐々に、ときおり激しく家産をすり減らし、没落していった。そのためか父は若くして酒毒で亡くなっている。

こうした事情が重なり、母は伏見から大阪方面に毎日行商に出るようになった。このため松之助は祖母に育てられ、七歳になると母に同行するようになった。

商いがうまくいくと、行商の帰り、大坂街道の枚方宿近くにあった茶店でお茶をいただくのが大きな楽しみだった。

八歳になる年の春、その日は商いがとんとん拍子でうまくいき、まだ日の高いうちに伏見への帰路を急いだ。

枚方あたりにさしかかると、一陣の青嵐（あおあらし）が茶店の幟（のぼり）をはためかせていた。

お茶をいただくことにした。のどが渇いていた松之助はうれしくてしかたない。

床几（しょうぎ）に腰を下ろし、さてお茶をいただこうとすると、自分のうしろにおはぎがおかれている。

母が頼むはずもない、そんな余裕はうちにはないはずと思い、母の顔を見た。母も訝しい表情をしている。

「すみません。店のかた、なにかの間違いと思いますが、おはぎがおかれています」

すると馴染みの女主人が出てきて

「いらんこととはぞんじますが、ぼんにたべてもらおとおもいまして」

松之助は母が怒ると思った。

すると母はすくと立ち上がり、女主人にていねいに礼をのべ、大きな声で言った。

「松之助、これが人の情けだす。よう覚えとおきなはれ」

生涯忘れなかった。胸に刻んで、努力し、のちに大阪西区の新町で大きな仕出屋を一代で築くことになる。これはまた別の話。

店は昭和20年の大空襲で焼けてしまったが、「人の情け」の話は今も子が八歳になると語られ、時間をかけて家人の心のあり様を形づくっている。

こうした家族の物語は散る桜花のように心に落ち重なっていくのだろう。

我が青春の記

体育学部准教授
尾関一将

出会いに恵まれた人生

出会いに恵まれた人生だと改めて感じる。大した選手でなかったが、あこがれのチームだった中京大学水泳部にどうしても入部したくて、苦手な勉強を頑張って受験した。センター入試利用で合格したせいで（学力が高いと勘違いされた）、わが恩師である高橋繁浩先生からは「指導者が少ないこのチームに、選手ではなくマネジャーとして力になってほしい」と監督専用のユニホームを手渡され、お願いされた。1週間悩んだ揚げ句、しぶしぶ了承した。

そのころの水泳部は部員100人と大所帯だったが、指導者やスタッフも少なかったため、様々な仕事を担当した。初めは物品契約に始まり、リクルートなどの重要な仕事も頼まれるようになり、最終年では選手のコンディショニング管理などを担当し、アテネオリンピックの直前合宿の帯同や、日本代表トレーナーに直接指導を受けるなど、今となっては信じられないような様々な経験をさせていただいた。

卒業後は就職することも考えたが、オリンピックコーチの夢を追うために、大学院でさらに勉強をすることを決意した。大学院時代は実験をするのが楽しく、研究室に入りびたりの毎日だった。早朝の水泳部の練習から始まり、その後は研究室で、同期や先輩方と夜遅くまで討議を重ねた。大学院時代に研究に専念していなかった私に、「尾関は水泳指導と研究が両方できてやっと一人前だから両方頑張りなさい」と応援してくれたのは、もう1人の恩師である桜井伸二先生だった。2人の恩師や仲間に恵まれ、研究活動をしつつ、水泳ではアシスタントコーチとして10数人の日本代表選手輩出や、全国選抜合宿の代表コーチとしての経験を重ねたのが、私の基礎となっている。恩師達の言葉通り、修士課程修了後にすぐに福岡大学スポーツ科学部に助手、助教として勤めさせて頂き、現在では大阪体育大学で、夢であったオリンピックコーチになるために、学生たちとまい進している。私は改めて幸せ者であると思う。

教育学部准教授
髙宮正貴

偶然を必然に変えた出会い

私が大学に入学した動機は不純なものだった。入学したのはキリスト教系大学の教育学科だ。ちょうど、学科の入試に英語と小論文で受けられるB方式ができた時だった（今はもうB方式はないようだ）。教育学科を受験したのはその受験科目のせいで、合格した大学の中で一番通いやすく、かつ一番偏差値が高いという理由で入学を決めた。

通っていた高校は別のキリスト教系大学の系列校で、大学への内部推薦入試があった。しかし、大学1、2年次のキャンパスへの通学が2時間かかるのと、もっと有名な大学に進学して好きな子を見返そうと思い、外部受験を志した。そうして有名大学に進学できたのだが、満を持してその子に告白したら、あっけなく振られてしまった。

大学への志望動機がそういう不純なものだったため、大学に通う意味を見失い、5月には大学に行かなくなってしまった。新たな目標を模索して、ミュージシャンになろうと仲間とバンドを結成するが、全然うまくいかず、3年生になって復学を決めた。3年次はゼミ選択の時期で、教育哲学ゼミの先生はちょうど他大学から移っていらしたときで、先生は1、2年生の時の私を知らないからしがらみもないというわけで、教育哲学ゼミを選択した。大学入学の動機と同じく、ゼミ選択の動機も不純だった（笑）。

しかし、先生の伝道者のような語り口と教育哲学の魅力に、私は取りつかれた。「教育とは偶然を必然に変えることである」というのは、先生の言葉だ。まさに先生との偶然の出会いは、私が研究者の道を歩む必然をもたらしたのである。

極める力。

人を学び、育て、支える。

大阪体育大学

【大学院】
●博士　前期課程　後期課程

【体育学部】
●スポーツ教育学科
●健康・スポーツマネジメント学科

【教育学部】
●教育学科

大学事務局
庶務部、教学部、入試・広報部
キャリア支援部、大学院事務室

大学附置施設
図書館、スポーツ局、社会貢献センター
情報処理センター
スポーツ科学センター

支援組織
教養教育センター、キャリア支援センター
教職支援センター、学習支援室
学生相談室・カウンセリングルーム

https://www.ouhs.jp

OUHSジャーナル　2018年（平成30年）4月2日（月）
発行所：**大阪体育大学**　OUHSジャーナル編集室　編集長 相馬卓司、編集助手 中村優志　　協力：教育後援会・学友会
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1　電話（072）479-3111　FAX（072）453-8972